

就職活動体験記

杉嶋 尚子（文学部教育学科初等教育専攻）

はじめに（自己紹介）

文学部教育学科初等教育専攻の杉嶋尚子と申します。私の4年間を振り返るにあたって、まず、所属する学科についての説明しておきたいと思います。立教大学文学部教育学科は、3年次に教育学専攻と初等教育専攻に分かれます。

教育学専攻の場合、教員免許の取得は卒業要件にはなりません、初等教育専攻では、小学校教諭が卒業要件となります。私の場合、初等教員免許と司書教諭資格を取得し、ファーストキャリアは民間企業で働くことになりました。

就職活動では、民間企業4社から内定をいただき、卸売業や専門商社として、主にICTの面から学校や図書館に携わることが可能な会社で働くことを最終的に決めました。なんのご縁か、大学1年生のときに受講した司書教諭課程の講義に、OGの方がゲストスピーカーとして来てくださったこともある会社でした。

四年間の変遷

大学入試の時点では、中高の教員免許（出来れば国語）を取得したいと考えていました。国語が良かったのは、自分自身、本が好きで、小～高と国語や国語科の先生が好きだったという単純な理由でした。

立教大学の教育学科入学し、そこで取得可能なのは、小学校教員免許か、中学社会と高校公民の免許だったため、大学1、2年時は、司書教諭資格と中高の免許取得を目指して講座をとり、履修を組んでいました。しかし、次第に、社会を教えるために学校の先生になりたいと思えるかどうか、不安を抱くようになっていきました。

自分が中高生だった頃に、社会がすごく好きだったわけではなかったことが大きかったと思います。また、科目の内容については、大学の講義だけで深い知識を身につけられるわけではないことから、専門のある他学部他学科（法学部、史学科など）で社会の教職をとった人の方が良い授業が出来るのではないかと考えていました。

中高社会の免許取得を続けていくことに不安を感じていた頃、アルバイトでは学童と中学生対象の個別指導塾で働き、サークルでは小学校での学習支援ボランティアを行っていました。そこでの活動を通して、私にとって、先生として働く場合、小学校が最もやりがいを感じられるのではないかと思ったため、中高教職の学修をやめて、初等教育専攻に進むことを決めました。（教育学科では、両方の免許の取得が制度的に不可能なのです。）

大学3・4年時のスケジュール

教育学科では3年生から、専攻が分かれるため、3年生の一年間は、初等免許取得のための必修が自動登録となります。そのため、周囲の同級生と比べて、講義数は多かったです。初等教育専攻に進んでからも、ファーストキャリアを教員にするか、民間企業にするかでは悩み続けていました。

しかし、就職活動のスケジュールをみると、3年生の6月に、夏インターンが始まります。その時期までには決めたいと考え、結局、民間就職することを決めました。

理由は、どちらもやってみたいという場合、学校の先生から民間企業よりも、民間企業が

ら学校の先生の方が、選択できる民間企業の幅が広がると思ったからです。また、もし先生になるとしても、もう少し自分自身が色々な経験を積んだ方が、教えることにも深みが出るのではないかと考えました。

そのように決めて行動を始めてからは、物理的以上に精神的な忙しさを強く感じるようになりました。3年生の間は、初等教育専攻の授業では、全くの初心者からピアノの練習を始め、初めての模擬授業をオンラインで行ったりしていました。就職活動では、大手志向ではなかったので、自分はどのような企業で働きたいのか考えるところから始めました。この時期の一番の後悔は、意欲をもって入ったはずの必修ゼミでのゼミ論が、やっつけ仕事になってしまったことです。

どのような企業で働きたいかに関しては、自己分析や色々な人と会話を繰り返す中で、事業の理念や社会貢献度の高さを重視することに決め、介護業界と教育に携われる企業を中心にみていくことにしました。介護業界での就職活動は、人手不足なこともあって順調に進み、3年生の12~2月ごろに複数内定をいただくことが出来ました。4年生の5月頃か9月頃、どちらかには教育実習に行くことが決まっていたので、早めに内定をいただけたことで、少し安心することが出来ました。

順調にいかなかったのは、教育に携われる会社に絞った就職活動の方でした。教育に携われる民間企業で募集が多いのは、塾講師やインストラクターなどの職種だったのですが、せっかく民間就職するならば、学校の先生に近い形態ではない職種を望んでいました。

そこで、一般的な就職活動の方法の一つのように、業界や同業他社で芋づる方式に受けていくのではなく、教育に携わることができるという点で気になった会社を、IT、商社、メーカー、出版、etc...と業界を絞らずに受けていきました。最終的に、就職先として選択した企業に内定をいただけたのは、4年の7月中旬でした。

4年生になると、単位が足りていて、内定も得ている友人は、趣味に没頭したり、感染状況に配慮しつつ遊びに旅行に奔走したりしている様子が SNS を通じて伝わってきました。それに対して私は、9月に教育実習を控えた中、春学期の後半まで就職活動が長引き、それと並行して初等教員免許取得のための講義と卒論ゼミを受講していたため、相変わらず多忙感がありました。

卒論ゼミは必修ではなかったのですが、3年時の必修ゼミのリベンジとして、通年でとることに自分で決めたので、絶対に放り出したいと思っていました。卒論ゼミは、自分の興味関心を自覚してテーマを決めるところから始まったのですが、その過程は、教授やゼミメンバーとの対話を通じたカウンセリングや人生相談のようになっていました。

精神的に限界に近い時期も正直あり、その時期は、自分が何をしたいのかわからなくなってしまっていました。人生には正解の選択肢があるはずで、誰かにそれを教えてほしいという気分になっていました。そのような時期に、卒論ゼミの教授が、「どんな選択をしても、自分で正解にするしかないし、それ以外の選択肢はない。」という言葉をかけてくださったのが印象的でした。周囲の支えがなければ、辛さを乗り越えることが出来なかった時期でした。

私の3、4年生でのスケジュールを改めて振り返ると、ずっと何かに追われ続けている感じのある2年間だったなあと思います。当時は、自分でやると決めたことのはずなのに、苦しい、辛い、投げ出したいと感じることも多かったのですが、今振り返ると、むしろ、コロナ禍でも充実した大学生活となつてよかった気がします。

おわりに

今回、司書課程の後輩のための就職活動体験記を書くというお話を中村百合子先生からいただいた際、内容や形式は自由とのことでした。そこで、書き始める前に、過去の先輩方の体験記を参照させていただいたのですが、先輩方は司書を志し、自らの公務員試験を振り返ったアドバイスをされている方が多かったです。

それらの先輩方と比べ、私の体験記は、あまり実用的ではなく、「司書課程の後輩のため」になったかどうかはわかりません。また、大学4年間を通して、効率や要領のよい学びをしてきたとはいえません。初等教育専攻の必要単位数は134単位なのですが、先日の卒業判定では、放棄した中高社会の教員免許状、司書教諭資格、卒業論文の10単位を含めると、172単位とっていました。

真面目に学修し、たくさんの単位をとったことを、誇りに思っているわけではありません(笑)。時間には限りがあるので、優先順位をつけて取捨選択していくことの大切さを痛感した場面は多々ありました。共に司書教諭コースを受講していた友人たちの中には、途中で取得しないことを選択した人も数人います。ファーストキャリアで、司書教諭資格をアピールポイントにする就職活動はしないからという理由でした。

ただ、大学4年間の中で就職活動や卒論執筆を経験して、人生の中でいつ役に立つかわからないものを学ぶことも大切だと感じました。私自身は、凶らずも、司書教諭コースで学んだことが生かせるのではないかと思える進路を選ぶことになりました。

就職活動は、自分自身を選んでもらうための準備や対策が必要になります。そのためのセオリーを先人から学び、対策をすることは、内定の可能性を高めるために大切なことかもしれません。また、早めに目標をたて、コツコツと努力することも大切です。

それはそうですが、最終的に一番大切なのは、どこに就職するかではなく、自分が進むことになる道に自分自身が納得できるかだと思います。

後輩の皆様方の就職活動が、内定を得るまでの過程も含めて、ご自身が納得のいくものになることを願っています。